S. Ashina

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化　　１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家　　３．キリスト教の国教化
４．三位一体論の形成過程とその意義　　５．研究発表１：齋藤、田中
６．修道制の展開　　７．キリスト教教父２――アウグスティヌス
８．中世キリスト教世界のダイナミズム
９．キリストと文化――スコラ的文化総合
10. 研究発表２（「キリスト教学研究室」にて）：張、立川　12/24
11. 自然神学と歴史神学　1/7
12. イスラームと１２世紀ルネサンス　1/14
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」）　1/21

＜前回＞中世キリスト教世界のダイナミズム

（１）古代から中世へ――ゲルマンの大移動

１．年表１：ゲルマン関連
２．年表２：キリスト教会関連

（２）ゲルマン大移動のもたらしたもの

１．古代から中世への転換期：ローマ帝国からポスト・ローマ国家（小国家時代）へ
　政治的統合から宗教的文化的統合へ
２．移動＝民族形成
３．従来の学説：古代の終焉（厳密には西ローマ帝国の滅亡）＝暗黒時代
　　しかし、地域によっては、古代と中世の連続性は一定程度確保された。
４．古代の終焉の理由：巨大すぎた領土と経済構造の変動がマクロな要因となった。

（３）ゲルマン民族とキリスト教

　ローマ帝国による国教化にもかからず、国家自体（西ローマ帝国）の崩壊により、政治権力との関係構築をゼロから行うことが必要になった。
　二人の大教皇（レオ一世とグレゴリウス一世）が直面したの課題。
５．西方教会（ローマ教会）の地位の確立：
６．ゲルマン後継国家。「地方教会」（Landeskirche）の形成。
　　西欧ラテン世界における教会的秩序の分析：教権と俗権との関係は複雑。
７．レオ一世（在位 440-461）：「レオ一世以後のローマ教皇、殊にグレゴリウス一世はペテロの聖座の継承者として、地上における「キリストの代理者」（Vicarius Christi）の地位を占め」（565）、「ペテロ＝岩＝教会」という理念の成立の意義と問題
９．ゲルマン民族のキリスト教化。まず異端的キリスト教が、次に正統キリスト教が。
10. グレゴリウス一世（在位 590-604）
　ゲルマン諸民族のカトリック化の意義を認識していた（ゲルマン宣教構想）。
　　ビザンティンからフランクへの転換　→　ゲルマン宣教の意義と問題

（４）中世社会の構造と動態

１．中世社会の力学：教会と王権（教皇と皇帝）、都市と農村
　　キリスト教とイスラーム
２．キリスト教のダイナミズム：イエス運動の宗教理念＋制度化
３．中世社会の変動と新しい宗教性の展開：下部構造から上部構造？
　・農業革命　→　都市の発展
　・都市民衆の宗教性　→　異端的民衆運動と教会の対応
　　十字軍（アルビジョア十字軍）、 新しい修道院運動（ドミニコ会、フランシスコ会）、
　　異端審問制度
４．長期にわたるダイナミズムと安定度の高い構造性

（５）中世都市とキリスト教

５．古代都市（ヘレニズム都市）との関係→地域的多様性
６．7 世紀以降の人口増加、土地の開墾・技術改良による農業の集約化と生産力の増大。
８．「文化としての都市」「ヨーロッパ中世都市がキリスト教という宗教を軸にまさしく新たら都市空間をつくりだしたという点」（河原、7）
都市の両義性：天上の都市と地上の都市の区別（アウグスティヌスの『神の国』）
10.「市民」の登場：都市の自由と自治を享受し担う主体。制約により市民権を得、権利とともに義務（軍役など）を負う。
11. 都市の暦（守護聖人の祝祭など多様な祭礼と宗教儀礼）→演劇空間としての都市
公共時計の出現　→時間の秩序化

（６）教会と王権

・紛争解決の手段としての儀礼。「中世をつうじて、とくにその初期から盛期にかけて、支配者層の間での紛争解決に頻繁に援用された「仲裁」」「「降伏」儀礼」（池上、11）。
・階層的宇宙（自然から超自然・恩恵へ。サクラメンタルな宇宙）の中で、各階層を結び付ける象徴と儀礼が機能し、それが社会秩序の安定化を可能にする。
「可視的ものを通じて不可視的ものへ」（per visibilia ad invisibilia）

９．キリストと文化――スコラ的文化総合

（１）宗教と文化

１．「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）
キリスト教と世俗文化との関係性をめぐっては、これまで多くの議論がなされてきたが、ニーバーの類型論はその古典的な研究といえる。
断絶・対立（テルトゥリアヌス、トルストイ）
／中間（差異を前提とした関係付け。
階層性：スコラ的文化総合
緊張：ルター
回心・変革：ヨハネ、ニーバー自身）
／連続性（自由主義神学）
東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局。
キリスト教思想史・キリスト教史、組織神学、キリスト教倫理
２．スコラ的な文化総合
階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界に構造的安定性をもたらす。
「存在の大いなる連鎖」（神から物まで）
偽デオニュシオース・アレオパギテース
天上の位階／教会的位階／世俗の身分秩序
cf. 近代以降、近代から現代へ
３．スコラ学（13 世紀）
哲学（ギリシャ哲学）と神学：単純に区別できる関係ではない。相互連関・相互影響。
・アリストテレス（イスラーム経由）主義とアウグスティヌス主義
・ドミニコ会とフランシスコ会
↓
緊張関係
人間の魂・世界は永遠か？
神の知としての神学、「聖なる教」（sacra doctrina、トマス）
聖なる教に属する神学と哲学の一部門としてのあの神学との区別
自然神学と啓示神学、啓示神学と聖書
↓
神学の概念史における中世

４.「単に対象構成のラチオのみならず対象内容をも峻別するようになるが、トマスの「聖なる教」は、いわゆる「自然神学」に対立する意味での「啓示神学」よりも内容の範囲が広くて、いわゆる自然神学の取り扱う内容をも包含している。」（山田晶責任編集『トマス・アクィナス』中央公論社、84-85頁）

「自然の光のもとに知られうるもの」は、「啓示の光において知られうるもの」と部分的に重なる。同一の知識が、受け手の知性の段階に応じて、二つの仕方で知られる。

↓

存在と認識の階層構造

５．パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「神学の学問性が十三世以来初めてその自己理解についての議論において優先的な役割を果たすようになったことである」、「十三世紀というのは、一二〇〇年頃にパリ大学が誕生したのを筆頭に最初の大学が誕生したのを見届けた時代である。」(15)

「たしかに「神学」という表現は、すでにかなり以前から流通していたが、もっとも狭い意味しか持っていなかったし、それが十二世紀おいてもまだ影響力を持っていた、つまり、キリスト教の教説、すなわり神や三位一体についての単なる呼び名として神学という表現が使われたのである。」(15)

「神学の学問性という主題は、神学を大学とのその中で結びつけられた諸学問との中に位置づけるという主題と共に与えられる。それゆえその主題は十三世紀において初めて、特にアリストテレスの学問概念に誘発されて生じたのである。それ以来、神学は知恵（sapientia）としてだけでなく、知識(scientia)としても理解された。その背景には、キリスト教の思惟の真理性を一般の思惟を基盤として確証するという基本的な思惟が働いている。このような関心は十三世紀以来、神学の学問性が神学の自己理解にとってもつ意義において表明されている。」(21)

６.ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社。

「トマスの世紀であるまさにこの十三世紀に、教育の中心としての修道院が解体され、大学とともにそこでの学問が登場した時」、アリストテレスの哲学は「画期的な作用を及ぼすことになった。」(153)

「神学のために中世的・ローマ・カトリック的なパラダイムの成熟した古典的完成形」「神学全体の新しい構造化」

「(1)信仰より理性　(2)比喩的・霊的な意味より文字どおりの聖書の意味　(3)恩寵よりも自然本性　(4)特殊なキリスト教的モラルよりも自然法　(5)神学より哲学　(6)まとめれが、本来的にキリスト教的なものより人間的なもの」(168)

７．アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』ちくま学芸文庫。

「初期ゴシック建築がスゲリウス（シュジェ、シュジェール）のサン=ドニで誕生したしたのと同じ瞬間と同じ環境において、初期スコラ学が誕生したのである」、「思考することの新様式と、建てることの新様式」「とはともに、パリを中心とする半径一〇〇マイルに満たない円の中に包含される地域からはじまった」(10)、「盛期スコラ学は十二世紀の変わり目に始まったと一般に考えられているが、それはまさしくちょうど、盛期ゴシックの体系がシャルトルとソワソンにおいて最初の大成功をなしとげたその時のことである」(10-11)、「盛期スコラ学の顕著な諸特徴は盛期ゴシック芸術を性格づけている諸特徴と著しく類比している。」(11)

（２）中世の知的統一世界

８．二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道

神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学

人間の自然的理性（理性本性）の能力による神認識＝自然神学

９．創造論　→　世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する（知恵思想）。

→　科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為（詩編19編を参照）

10．類比（アナロギア）の論理：作品から作者への推論

神：人間＝父：子　→　神＝（人間×父）÷子

存在のアナロギア（analogia entis）

cf. アナロギアの基礎をめぐって

11．「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」（ローマの信徒への手紙 1.20）

「2　天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3　昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4　話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても　5　その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。」（詩編 19 編）

12．自然神学：世界の秩序の探求から神へ

(1) 前提：　古代ギリシャの自然学と哲学的神学、旧約聖書の創造論と知恵思想

ヘレニズム的ユダヤ教：「無からの創造」の背景

(2) 神の存在論証

(a) 存在論的類型：アンセルムス、デカルト、ヘーゲル　→　次回

(b) 宇宙論的類型：トマス（５つの道）、ニュートン、人間原理

・経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・運動・変化の存在／「原因―結果」の連鎖／第一原因

→これを神と呼ぶ

何が問題か？　哲学者の神？

神の存在論証とは、その意図は？

13．中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

↓

・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

・実在の構造／知識の構造／大学という制度的な構造

＜参考文献＞

１．ヘルムート・H・ニーバー　『キリストと文化』新教出版社。

２．芦名定道　『自然神学再考』晃洋書房。

３．中川純男・加藤雅人編『中世哲学を学ぶ人のために』世界思想社。

４．Ｅ．ジルソン『中世哲学の精神　上下』筑摩書房。

５．山田晶『在りて在る者』創文社。

６．Ｋ．リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。

『中世思想史』平凡社ライブラリー。

７．金承哲『神と遺伝子――遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、100-108、225-227頁。

８．稲垣良典編『教養の源流をたずねて――古典との対話』創文社。

９．南川高志編『知と学びのヨーロッパ史――人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房。

川添信介「第九章　専門と教養――中世パリ大学の理念から」